東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十七卷　第一號

昭和三年七月一日發行

論叢

一般社會學の概念……文學博士　米田庄太郎

經濟靜態について……文學博士　高田保馬

目的稅論……法學博士　神戸正雄

保險と偶然……經濟學博士　小島昌太郎

說苑

計算貨幣と交換貨幣……經濟學士　福井孝治

經濟法の概念……經濟學士　橋本文雄

雜錄

希臘現代の經濟學……法學士　山口正太郎

大戰中の佛蘭西の通貨……經濟學士　島本融

フォン・ベロウ教授を憶ふ……經濟學士　上田藤十郎

獨逸都市の財政統計……經濟學博士　汐見三郎

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

（禁轉載）

經濟論叢　第二十七卷　第一號　通卷第百五拾七號　昭和三年七月發行

論叢

一般社會學の概念

米田庄太郎

目次

(一) 問題
(二) 一般社會學概念の由來——コントの社會學概念の批判
(三) 一般社會學概念の確立——ミルの社會學概念の批判
(四) ジムメルの特殊社會學概念の批判
(五) デュルケムの包括社會學概念の批判
(六) 結論

(一) 問題

私は社會學は先づ一の哲學或は哲學的主義でなく、又社會を對象とする一の哲學的學科卽ち社

會哲學と同一視さる可きものでなく、又社會現象を研究する一の方法に過ぎないものでなく、又社會政策學の如き實際學とは嚴然區別さる可きものにして、要するに社會現象を對象とする一の科學である、隨ふて社會現象を對象とする他の諸學問が、夫れ夫れ其の對象とする社會現象を、哲學的に洞見し評價せんとするのでなく、科學的に認識せんとする場合に、社會科學と稱せられると同じ意味にて、社會學は一の社會科學であると考へる。併し次には私は、社會學は特に社會現象の一般的方面を對象とする社會科學として、夫れ夫れ特に社會現象の特殊的方面を對象とする他の總ての社會科學に對して、其等の社會科學が相互に對して有するとは異なれる關係を有するもの、卽ち其等の社會科學相互の間に存立する關係は、特殊的なるもの相互の間に存立する關係であるが、社會學と其等の社會科學との間に存立する關係は、一般的なるものと特殊的なるものとの間に存立する關係であると考へる。要するに私は社會學は、第一に一切の社會現象の共同的基本的元素的なる方面と云ふ意味にて社會現象の一般的方面を究明して、他の總ての社會科學に一般的基礎を與へる社會科學として、第二に總ての特殊的社會現象の相互關係に於ける全體的狀態と云ふ意味にて社會現象の一般的方面を究明して、他の總ての社會科學の結果を一般的に總合する社會科學として、他の總ての社會科學が特殊社會科學と稱せられるに對して、一般社會科學と稱せらる可きものと考へる。されば私の見る處によれば、社會學は本來一般的なる社會科學

にして、特殊的なる社會科學は社會學でないのであるから、一般社會學と云ふ語は二重に一般的と云ふ意味を含める重複語であると思ふ。若し其の一般と云ふ語は、單に社會學が一般的なる社會科學であると云ふ意味を、特に强調するだけに過ぎないものと見れば、或は別に不都合はないかも知れないが、併し普通の語法によれば、一般社會學と云へば特殊社會學の存在を暗示し、之れと對立するものの如く誤解され易い。然るに社會學は本來一般社會科學にして、そうして其の外には特殊社會科學は存在するが、特殊社會學なるものは存在しないのであるから、右の如き誤解を起し易き一般社會學なる語は、なる可くは用ひない樣注意したいものと思ふ。但し社會科學を總て社會學と稱し、そうして之を一般社會學と特殊社會學とに區別する人々にありては、一般社會學と云ふ語は必要かも知れないが、併し私は一切の社會科學を社會學と總稱するは、一方に於ては學問論上甚だ潛越であつて、それが爲めに特殊社會科學者の反感を招いたことは少なくなく、隨ふて社會學の發達が阻害されたと思ふ、又他方に於ては社會學の概念を廣大茫漠たるものとならしめ、其の嚴密なる規定を妨げると思ふ。尙ほ後にやゝ詳しく論述するが、ヅュルケムの如くに社會學は一切の社會科學の體にして、一切の社會科學は社會學の諸分枝であると見做し、一般社會學をもヤハリ社會學の一分枝或は一部門と見る見解も、同樣な非難を受く可きものと思ふ。然るに一般社會科學としての社會學の概念を表示する爲めに、普通に一般社會學なる語が用

ひられて居る。それで私も此處に本論文の題名として此の語を用ひたのであるが、併し私は上に述べし處によりて知られる如く、決して特殊社會學なるものを認め、之れに對立するものと云ふ意味にて此の語を用ひるのでなく、只社會學は一般社會科學であると云ふ意味を特に表示する爲め、便宜上此の語を用ひるだけである。

さて一般的と云ふ語は哲學上又科學上種々なる意味に用ひられて居るので、思想の混亂を避ける爲めには、其等の諸意味を詳しく嚴密に區別して用ひることは甚だ肝要である。併し私は此處では只社會學が一般的社會科學であると云はれる場合、或は一般社會學なる語が用ひられる場合に於ける、一般的と云ふ語の意味に付て考察するだけに止めるのであるが、此の場合には一般的と云ふ語は、主としてさきに述べし二つの意味に用ひられて居ると思ふ。又嚴密に云へば其等の二つの意味にか、又は其の何れにか用ひられる可きものと思ふ。併し第一の意味にて、一切の特殊的社會科學に一般的基礎を與へると云ふことを廣く解して、實質的な一般的基礎を與へると云ふ意味の上に、更に方法論的な一般的基礎を與へると云ふ意味をも含ませて考へることが出來る。かくて一切の社會科學の方法論の研究をも、一般社會學の一任務を見做し得られる。そうして實際上かく見做す社會學者も少なくない。私は嚴密に云へば、社會科學の方法論は學問論の一部門たる方法論に屬するものと考へるのであるが、併し學問論の發達の現狀や、又社會科學の發

達の現狀から考へて、之を一般社會學の一任務と見ることは便宜である、或は有益であると考へる。そうしてかゝる主旨で、社會科學方法論をも一般社會學の一部門と見做すのである。かくて一般社會學に於ける一般的と云ふ語は、總體に於て三つの意味を有することゝなる。そうして私は其等の三つの意味の何れの一か、又は二つに於て社會學の任務或は科學的目標を決定するのも、總て社會學を一般的社會科學或は一般社會學と解するものと認めるのであるが、併し社會學の任務或は科學的目標を其の總體に於て包括し、完全に社會學の概念を規定せんとするに於ては、一般的と云ふ語の右の三つの意味を悉く包攝せねばならぬと考へる。かくて私は一般社會科學としての社會學を、社會科學の方法論の研究を目標とする部門としての組織社會學（systemative sociology）（即ち一切の社會科學を學問論的方法論的に基礎附け組織すると云ふ意味での一般社會學）と、一切の社會現象の共同的基本的元素的なる方面を意味する一般的方面を究明することを目標となし、そうして一切の特殊社會科學に一般的基礎を與へる部門としての純正社會學（即ち大體上今日獨逸の社會學者が形式社會學と稱するものに當るが、併し私の見方の特有性からして全然之れと合致するものでなく、種々なる差異を有する、尙ほ私は形式と云ふ語の意味が曖昧であるが爲めに、出來るだけ形式社會學と云ふ語を避けて居る）と、純正社會學に基づき、一切の特殊的社會現象を其の相互關係に於て考察し、社會現象の全體的狀態を究明することを目標と

なし、かゝる意味にて社會現象の一般的なる方面を研究し、一切の特殊社會科學の結果を總合する部門としての總合社會學（synthetic sociology）との三部門に大別せんとするのである。但し我國の社會學者中 la sociologie générale 或は general sociology を直ちに總合社會學と譯する人々があるが、それは穩當でないかと思ふ。général, general と云ふ語は社會學史上總合と云ふ意味の外に、上に述べし二つの意味をも有つて居る。されば la sociologie générale, general sociology は一般社會學と譯す可きである。私の此處に一般社會學と云ふは、卽ち la sociologie générale, general sociology, allgemeine Soziologie の譯語である。

右の如くに社會學を一般社會科學と認め、之を三部門に大別する私の見解は、私が二十數年前に立てゝ京大文學部に於て講述し、又大正二年に日本社會學院年報第一卷第一冊に於て發表したものである。そうして今日に至るも未だ歐米諸國の社會學者中、全然私と同じ見解を發表した人はないが、併し私は輓近に現はれたる新社會學論は、種々なる意味にて私の見解を直接又は間接に確證して居ると考へる。そうして結局歐米の社會學者の社會學概念は、私の社會學概念と大體上同一のものに到着するであらうと信じて居る。それで私は私の見解から見て輓近の歐米の社會學論を論評し、それが如何なる意味にて、私の見解を直接又は間接に確證するものであるかを明かにしたいと思ふが、先づ本論文に於ては、社會學は上に述べし一般的と云ふ語の三つの意味の

何れかに於て、本來一般社會科學であらざるを得ないものなることを論證したいと思ふ。是れ先づ此の點を明かにして置くことは、私の見解を固守し主張する上に於て、第一に肝要なる問題であるが、更に社會學の輓近の趨勢は一般社會科學としての社會學から、特殊社會科學としての社會學への進展であると見る見解が、我國の新進社會學者間に汎く行はれて居ると思はれることから考へて、かゝる見解は全く社會學の學問論的性質の誤解から起れるものなる事を明かにするは、我國今日の社會學界に於ける一急務であるとも思はれるからである。

今社會學は一般的社會科學であると見る傳來の通說に對して、近來起れる反對說を批判的に吟味して、其の正當でないことを明かにせんとするに當つて、先づ右の通說の由來を考究し、如何にして社會學が一般的社會科學として一般に承認されるに至つたかを了解して置くことは肝要であると思ふ。それで私は本論文に於て先づ此の問題を論究することとする。次に社會學は一般的社會科學である、或は社會學とは卽ち一般社會學であると見る通說を排斥し、或は之れに反對する諸說を詳しく吟味すると、それは大體上二種に別たれると思ふ。其の一は社會學は一般的社會科學であると見る見解を否定して、之を他の社會科學と同樣な一の特殊社會科學であるが如く見るものにして、其の二は社會學とは卽ち一般社會學であると見る見解には反對するが、併し一般社會學の概念其物は承認し、そうして一般社會學をもヤハリ他の社會科學と同樣に、社會學の一

分枝と見るものである。私は便宜上假りに前者を特殊社會學概念と稱し、後者を包括社會學概念と稱して置く。但し此處に特殊社會學概念と云ふは、云ふまでもなく一般社會學に對して特殊社會學の存立することを主張すると云ふ意味のものでなく、社會學は一般社會科學ではなく、特殊社會學であることを主張すると云ふ意味のものである。又包括社會學概念と云ふは、社會學は一般社會學よりも廣大なる範域を有し、之をも包括するものであることを意味するものである。そうして私の見る處によれば、特殊社會學概念は大體上ジムメルによりて創說され、又彼によりて先づ最とも明白に論述されたるものであると思はれる。但しジムメルに先立つてタールドの立てた純正社會學の概念は、實質的にジムメルの形式社會學の概念と大に類似するものであるが、併しタールドは純正社會學を一の特殊社會科學とは考へず、一般社會科學と解して居たのである。それで本論文に於ては此の見解の代表的なるものとして、特にジムメルの說を批判的に論究することゝする。又包括社會學概念は大體上ヅュルケムの最とも明白に創說せるものにして、今日佛蘭西の社會學界に於て大勢力を振ひつゝあるヅュルケム派社會學者の普通に唱道して居るものであるから、私は本論文に於ては專らヅュルケムの說を批判的に論究することゝする。

(二)　一般社會學概念の由來＝コントの社會學概

念の批判

夫れ一切の社會現象もヤハリ自然法則即ち因果必然的連結によりて支配される自然現象の一部分にして、社會現象の自然法則を發見することは、一切の社會的學問の最根本問題であると見る見解は、決して第十九世紀に入りて始めて發達せるものでなく、既に第十七世紀及び第十八世紀に於てヤヽ連續的に發達して居たものである。更に孤立的には、それ以前の諸時代に於ても其處此處に現はれて居たものである。併し此の見解からして、社會現象全體を組織的に研究する一の獨立なる實證科學或は自然科學を建設せんとする思想は、大體上第十九世紀に入りて始めて現はれたるものと見做し得られる。そうしてかゝる意味にて、吾人はサン・シモン特にオーギュスト・コントを以て、一の獨立なる自然科學としての社會學の創設者と、大體上見做すことが出來る。

コントは科學を根本的に一般的抽象的科學即ち基本科學と、特殊的具體的科學即ち派生科學とに大別し、又基本科學を其の對象とする現象の一般性の遞減と複合性の遞增との原理に從ふて、數學天文學物理學化學生物學及び社會學等に體統的に分類し、そうして此等六種の基本科學を以て、彼の科學的哲學即ち彼が實證哲學と稱するものを構成したのである。かくて彼が社會學と稱するものは、彼の實證哲學體系の冠冕として最後の地位を占め、且つ其の精神に於て實證哲學體

系全體を支配する一部門にして、社會現象の一般的抽象的科學即ち基本科學である。そうして彼は一切の他の社會科學を、特殊的具體的科學即ち派生科學と見たのである。併し彼は當代の學問界及び實際生活上の狀態から見て、何よりも第一に肝要なるは、社會現象の基本科學としての社會學を建設することであると確信して居たから（但し彼は大革命後大混亂に陷れる當代の社會を根本的に改造し、其の健實なる發達を圖る根本策は、思想の統一を確立することであるが、然るに思想の統一は當代の進步せる歐洲の社會にありては、只確實なる實證的知識に基いてのみ確立され得るものにして、かくて實證的知識の總括的組織的大體系即ち彼の實證哲學と稱するものの體系を建設することが甚だ肝要であると確信し、然るに實證哲學の冠冕たる其の最後の部門をなすものにして、且つ其の精神に於て實證哲學全體を根本的に支配す可き社會現象の基本的實證科學即ち社會學は、まだ全く開拓されずに放棄されて居るから、實證哲學體系を建設する爲め、隨ふて社會改造の根本策を確立する爲め、今日何よりも第一の最大急務は、實質的に社會學を建設することであると考へて居たのである）、社會學の實質的建設に專ら力を注ぎ、社會科學の方法論問題の詳細な研究には、敢て注意を向ける餘裕はなかつたと思はれる。かくて彼は社會學と他の社會科學との關係に付ては、只其の間に基本科學と派生科學との關係が存立することを、方法論上一般的に指示するだけに止まつて居たので、此の關係に關する彼の思想の眞意は詳しく明亮に

は了解され難い。そうしてそれよりして彼は社會現象の科學としては、只社會學の存立することを認めるだけで、他の一切の社會科學の存立を否定したと云ふが如き解釋が下され、彼の崇拜者はかゝる解釋によりて、彼の社會學の偉大性と、社會現象の眞實な統一的科學的研究の發達に對する効績とを讃稱し、之れに反して彼の反對者は、彼れと同じく社會現象の眞實なる研究は自然科學的に遂行さる可きものなるを承認する人々でも、同樣な解釋によりて彼の社會學は科學進歩の根本條件たる分業の原則を無視する空想或は妄想であると非難した。そうして彼の眞意を正當に了解せんとする人々にありては、彼の社會學概念はつまり單一社會學の概念、卽ち社會科學としては只社會學が存立するのみであると云ふ意味の社會學概念であるか、又は何れかの意味での一般社會學の概念であるかは問題となるのである。

今コントの社會學概念に於て特に强調されて居る點は、總ての社會現象は相互に甚だ親密なる連帶關係を有するものにして、何れの社會現象も他の社會現象から切り離して單獨に考察されるに於ては、其の眞義は決して理解されるものでなく、何れの社會現象も他の總ての社會現象との關係に於て、卽ち全體との關係に於て考察されねばならぬと云ふことである。そうして彼は右の見地からして古典經濟學の方法論を批評し、かゝる方法によりては決して經濟現象の眞義は理解され得るものでないと言明したので、それよりして彼は經濟學の科學的自律性を、更に同じ理に

よりて總ての他の特殊社會科學の科學的自律性を否定したと推斷されたのである。併し社會現象の連帶性を强調することは、必ずしも各種の社會現象の專門的研究の科學的自律性を全然否定することにはならない。少なくも一定の度合に於て其の科學的自律性を承認し得るのである。云ふまでもなく社會現象の連帶性を重要視し、其の全體的考察を强調するに於ては、各種の社會現象の專門的研究に完全なる自律性を認めることが出來ない。其の認められる自律性は制限的なもの或は相對的なものであらざるを得ない。そこで問題となるのは、コントは一般的抽象的科學としての基本科學に對して、特殊的具體的科學としての派生科學に、隨ふて社會現象の基本科學としての社會學に對して、其の派生科學としての他の社會科學に、全く科學的自律性を認めなかつたか、又は如何程かの度合に於て之を認めたかと云ふ事である。若し彼は全く之を認めなかつたのであるならば、彼の社會學概念は云ふまでもなく單一社會學概念である。併し如何程かの度合に於て之を認めたのであるならば、彼の社會學概念は全然單一社會學概念であると云ふことが出來ない。彼は基本科學と派生科學との關係に就ては、後者は前者の確立せる原理を應用して特殊的具體的問題を理解し、說明し解決するものと云ふ意味にて簡單に論述するに止まり、後者の方法論を詳しく論述して居ないから、確實に彼の眞意を推斷することは出來ないが、少なくも多少の獨立な立場を派生科學にも認め、隨ふて多少其の科學的自律性を承認したのであらうと推察し得

られる。併し其の承認せる自律性の度合は、果して基本科學に對して派生科學、社會學に對して他の社會科學の自律性を主張し得るほどの度合のものであつたかは疑問である。若しそれほどの度合のものであつたとすれば、彼の社會學概念は單一社會學概念ではなくして、一般社會學概念であつたと云ひ得られるのである。要するにコントの社會學概念は、單一社會學概念であると云ふ程、派生社會科學或は特殊社會科學の自律性を認めないものでなければ、又一般社會學概念であると云ひ得られる程、特殊社會科學に大なる自律性を認めるものでもなく、つまり兩者の中間に浮動する曖昧なものであつたかと思はれるのである。されば嚴密に云はゞコントはまだ一般社會學の概念を確立して居なかつたと云はねばならぬ。そうして私はコントの社會學概念を大體上承認しながら、しかも社會學と他の社會科學との關係を方法論的に詳しく論究し、他の社會科學の相對的自律性を明かに論證することによりて、一般社會學としての社會學の概念を始めて確立したのは、ジョン・スチュワールト・ミルであると思ふ。そこで次に私はミルの社會科學論を考察して、一般社會學の概念、即ち一般社會科學としての社會學の概念が、如何にして確立されたか、又ミルの一般社會學の概念は如何なる意味での一般社會學の概念であつたかを究明し、更に彼の社會學概念と、次に論究せんとするジムメルの特殊社會學概念、即ち一の特殊社會科學として見る形式社會學としての彼の社會學概念との間に、如何なる論理的連絡があるかを指示したい

と思ふ。

(三)　一般社會學概念の確立――ミルの社會學概念

ミルの社會科學論に就ては、私は昨年本雜誌上で發表せる數論文に於てかなり詳しく述べて置いたから、此處では只彼は如何にして一般社會學の概念を始めて確立するに至つたか、又其の一般社會學の概念は如何なる意味のものであつたかを、究明するに必要なるだけ說述するに止める。

さてミルの社會學概念は、彼の名著「論理學の一體系」第六卷第十章に於て論述されて居る處によれば、根本的には著しくコントの社會學概念と一致して居る。卽ち先づ社會學の對象は社會或は文明の一般的狀態であると認める點に於て、次に社會學の研究方法は歷史的方法或は逆演繹法であると認める點に於て、次に社會學を根本的に社會靜學と社會動學との二大部門に分つ點に於て、終りに社會進步の主要能因は知力或は思想或は思考能力の狀態であると認める點に於て、ミルはコントと根本的に一致して居る。そうして右の如くに根本的にコントの社會學概念と一致せる社會學概念を確立するに於て、ミルは大にコントの影響を受けたことは何人も疑はない事實である。併しミルは其等の基本概念を總て全くコントから學んだのであるか、又はコントの著作に

接する以前に、彼自身既に抱持して居たものであるかは問題とされて居る。されど私は此の問題を別に重要視しない。是れコント自身も其等の基本概念を全く獨創的に構成したのでなく、サン・シモンを始め其他の先輩から學べるものを精練したに過ぎないのであり、又ミルは早くからサン・シモンの著作に注意して居たからである。かくてコントの著作に接する以前の時代のミルの思想に於て、其等の基本思想或は其の中の或物が見出されるとしても、それを直ちにミルの創見に歸することは出來ない。尙ほ注意す可きはミルがコントに送れる最初の書簡によれば、彼は早くからコントの著作に接して居たことである。併し此の問題は何れに解決されるとしても、社會學概念の發生の研究に於てはあまり重要でないので、重要なるはつまり其等の基本概念を精練し、且つ組織的に結合して以て社會學概念を構成すると云ふことである。そうして此の點から見ると、吾人はミルには殆んど獨創性を認めることは出來ない。彼はコントを祖述する一人に外ならないのである。

併しコントの社會學概念は、さきに述べし如く、單一社會學概念であるか、又は一般社會學概念であるか不明であるので、嚴密に云へばまだ社會學を一の獨立なる科學として、明確に規定せるものと云ふことが出來ない。若し夫れが單一社會學概念であるならば、スペンサーの社會學概念の如く、哲學の一部門としてはとにかく、一の獨立なる科學として認められることは出來な

い。そうして夫れが一の一般社會學概念として明確に決定されるに於て、社會學は始めて一の獨立なる科學として建設し得られるのである。さればコントの社會學概念を明確に一の一般社會學概念として決定することは、一の獨立なる科學として社會學が建設され發達する爲めに、根本的に重要なる一條件であるが、今此の重要なる條件を始めて充たしたるもの、或は少なくも其の最初の主要なる一人はミルである。そうして此の點に於て社會學史上、ミルの創見或は功績が認めらる可きである。要するに近世自然科學的社會學概念を大體上先づ確立したのはコントにして、其の點に於てはミルはコントの隨從者或は祖述者の一人に外ならないのであるが、併し之を明確に一の一般社會學概念として規定し、かくて一の獨立なる科學としての社會學概念を確立したのはミルの創見にして、そうして其の點に於て彼の社會學史上の功績が認めらる可きである。然らばミルは如何にしてコントの社會學概念を、一の一般社會學概念として明確に規定したか。

さきに論述せる處によりて察知される如く、コントの社會學概念を一の一般社會學として明確に規定する爲めに重要なる仕方は二つある。此等の二つの仕方は結局は同一の結論に到着するものであるが、併し其の出發點を異にして居る點から區別し得られるのである。其の一はコントの社會學概念に於て、社會學の對象と認められて居るもの、卽ち相互に連帶的なる或は合致（Consensus）を保つ諸般の社會現象或は社會の諸部分より成立する、社會或は文明の一般的或は全體

的狀態なるものを明確に決定し、一般社會科學として社會學を先づ嚴密に限定することにより て、それより各種の社會現象或は社會の各部分は、其の社會或は文明の一般的或は全體的狀態に依存しながら、しかも夫れ夫れ特有の性質を有し、かくて夫れ夫れ別々に研究さる可きものなること、隨ふて各種の社會現象を夫れ夫れ對象とする諸般の社會科學は、一般的には社會學に依存しながら、しかも夫れ夫れ一定の自律性を有する別々な科學として存立するものなるを論證することである。其の二は各種の社會現象が社會或は文明の一般的或は全體的狀態に依存しながら、しかも亦夫れ夫れ特有の性質を有し、そうして夫れが爲めに夫れ夫れ別々に研究さる可きものなること、かくて各種の社會現象を夫れ夫れ對象とする社會科學は、一定の自律性を有し、社會學から區別される又相互に區別される別々な科學として存立するものなることを先づ論證して、それより社會の一般的或は全體的狀態を嚴密に限定し、かくて之を對象とする社會學の領域を明確に決定することである。要するに右の二つの仕方の何れかを用ひて、コントが判然規定しなかつた社會學と他の社會諸科學との關係を明確に規定することによりて、此處にコントの云ふ社會學なるものは、他の社會諸科學を夫れ夫れ一定の自律性を有する特殊社會科學として承認する一般社會科學として確立され、哲學の一部門としてゞはなく、一の科學として存立するものなることが論證されるのである。

今ミルは彼の科學研究方法の論理的順序の上から見て、先づ第二の仕方によりて、社會學以外の社會科學が夫れ夫れ一定の自律性を有する特殊社會科學として存立し得ること、或は存立せねばならぬことを論證して、コントの云ふ社會學なるものは一般社會學として限定さる可きものなるを指示して居る。ミルは社會科學の研究方法の論究に於て、先づ彼の化學的方法即ち實驗的方法と稱するもの、及び彼の幾何學的方法即ち抽象的方法と稱するものが、社會科學に於て適用され難きものなるを論述し、次に彼の物理學的方法即ち具體的演繹法と稱するものの考察に進み、そうして此の方法によりて先づ如何なる社會科學が建設し得られるか、或は建設されねばならぬかを論述して居るのであるが、要するに彼は物理學的方法によりて社會學以外の社會諸科學が、如何にして特殊社會科學として建設され得るか、或は建設されねばならぬかを論證せんとして居るのである。

ミルの論ずる處によれば、社會現象間には普遍的合致（Consensus）が存立し、それが爲めに社會の作働の何れかの部分に於て起れる何事も、他の各部分の上に何等かの影響を及ぼさゞるを得ないに拘らず、又かくて何れの社會に於ても文明及び社會的進歩の一般的狀態が總ての部分的及び從位的現象の上に及ぼす影響の重大なるに拘らず、社會的事實の諸種類が概して、直接に又第一には異なれる諸原因に依屬すると云ふこともヤハリ同樣に眞實である。されば社會的事實の諸

種類は啻に有益に別々に研究され得るのみならず、更に別々に研究されねばならない。是れまさしく自然的有機體に就て、主要なる諸器官及び諸組織の各〻が、他の總てのものの狀態の影響を受けるに拘らず、又有機體の特異な體質及び一般的健康狀態が、何れの特殊器官の狀態を決定するに於ても、局所的原因と協働し且つ屢々之を壓倒するに拘らず、吾人は其等の諸器官及び諸機能の各々の生理及び病理を別々に研究せねばならないのと同樣である。そうして右の考察に基いて、獨立するのではないが併し夫れ夫れ區別される別々な社會學的考究の諸分枝或は諸部の存立が認められるのである。

ミルは先づ右の如くに一般的に、一定の自律性を有する社會科學として特殊社會科學の存立を論證したる後、特殊社會科學としての經濟學に就て、更にやゝ詳しく論じて居るが、左に其の大要を述べて彼の主旨を一層明確に示すことゝする。

今其の直接に決定する諸原因が、主として富の欲望によりて作用するものにして、又其處に主として行はれる心理學的法則が、より大なる利得がより小なる利得よりも選ばれると云ふ熟知されたる法則である處の、社會現象の一大部類がある。是れ人類の產業的卽ち生產的行動から發生する處の、又其等の產業的行動の生產物の分配が、暴力や任意贈與によりて影響されない以上、依て以て行はれる人類の行動から發生する處の、社會の現象の其の部分である。そうして其の人性

の一法則、及び其の法則によりて人心の上に作用する主要なる外部的諸事情から推論することによつて、吾人は社會の現象の此の部分を、それが只其等の諸事情の部類にのみ依存する以上、(社會の何れの他の事情の影響をも無視し、夫れ故に吾人が考察する其等の諸事情の可能的始源を社會狀態の他の或事實に遡及することも、亦他の何れかの事情が其等の事情の結果に干涉し、之を妨げ或は變更させる仕方を斟酌することも、全く顧慮しないで)說明し豫見することが出來る。此の如くにして、經濟學と稱せられる社會科學の一分枝或は一の特殊社會科學が建設され得るのである。要するに吾人をして社會現象の此の部分を餘他の諸部分から分離し、此の部分に關する一の社會科學を建設せんとするに至らしめる動機は、つまり吾人が社會現象の此の部分は主として、少なくも先づ第一には、只事情の一部類にのみ依存するものなるを見出すこと、及びタトヒ他の事情が干涉する時でも、只此の事情の部類に基因する結果を確知することだけでさへ、既に甚だ複雜な又困難な仕事であつて、先づそれだけを遂成し、然る後に之れに干涉する他の事情の生ずる結果を酌量するのが、得策であると考へることである。

ミルは化學的或は實驗的方法や幾何學的或は抽象的方法によりて、社會科學を建設せんとするは謬見であることを論じたる後、次に然らば物理學的方法卽ち具體的演繹法によりて、社會科學が建設し得られるや否やを考察して、以上述べし如くに、先づ特殊的社會現象を對象とする社會

科學が、一定の自律性を有する特殊社會科學として存立し得ること、又存立せねばならぬことを論證したのであるが、それによりて彼は又彼の逆演繹法卽ち歷史的方法と稱するものによりて、社會學が一般社會科學として存立し得ること、且つ存立せねばならぬことを指示したのである。然らば彼は如何に此の事を直接に論證したか。

ミルの論ずる處によれば、社會科學的研究に二種ある。第一種の社會科學的研究にありては、社會的事情の一定の一般的狀態が前定されて居て、そうして其の一般的狀態の下に於て、與へられたる一の原因から如何なる結果が生ずるかと云ふ問題が呈出され、それが物理學的或は具體的演繹法によりて解決されるのであるが、是れによりて上に述べし如く特殊社會科學が建設されるのである。然るに第二種の社會科學的研究にありては、呈出される問題は、社會の一定狀態の下に於て與へられたる一原因から、如何なる結果が生ずるであらうかと云ふことではなく、社會の諸狀態を一般的に產出する原因は如何なるものであるか、又其等の狀態を特質附ける現象は如何なるものであるかと云ふことである。そうして此の問題は逆演繹法卽ち歷史的方法によりて解決し得られるもの、又解決されねばならぬものにして、此の解決に於て一般社會科學として社會學が成立するのである。かくて此の一般社會科學卽ち社會學の領域を正當に決定し、之を社會科學的研究の從位的諸分枝卽ち特殊社會科學から判然區別する爲めには「社會の狀態」と云ふ語に含ま

れる諸觀念を確定することが必要である。

ミルは右の如き見地から一般社會學概念を積極的に規定せんとして居るので、即ち私がさきに第一の仕方と稱せるものによりて、之を企だてたのである。然らば彼は先づ社會の一般的狀態の概念を如何に決定したか。要するに社會の狀態とは即ち總てのより重大なる社會的事實或は社會現象の同時的狀態を意味するものである。そうして社會の狀態及び之を生ずる原因が科學の對象と認められる時には、其等の諸要素の間に自然的關連（natural correlation）の存立すること、其等の一般的社會的事實の結合のあらゆる種類が可能であるのでなく、只一定の結合のみが可能であること、約言すれば諸異の社會現象の諸狀態間に共存の諸齊一（Uniformities）の存立することが含意されて居るのであるが、此の事は實に其等の諸現象の各々が他の各々の上に及ぼす影響の自然的結果であるが故に當然であるのである。それは社會體の諸部分の合致と云ふことに含まれて居る一の事實である。併し一定の原因の結果である處の諸現象間に成立する共存の諸齊一は、其等の諸現象が依て以て現實に決定される因果の諸法則から生ずる結果であらねばならぬ。されば社會の各狀態の諸要素間に存立する相互的關連は、社會の一狀態と他の狀態との間の繼續（ザクセッション）を規制する法則から生ずる一の派生的法則である。是れ社會の各狀態の最近因は直ぐ夫れに先だつ社會の狀態であるからである。かくて社會學の基本問題は、つまり社會の何れの狀態も夫れに繼

く、又夫れに代はる狀態を、依て以て產出する諸法則を發見することである。

ミルは右に述べしが如くに、社會の經驗的法則を、共存の法則と繼起或は繼續の法則との二種に大別し、そうしてコントに從ふて前者を研究するものを社會靜學と稱し、後者を研究するものを社會動學と稱して居る。併し彼は又右に述べし如く、共存關係はつまり繼起關係によりて決定されるものと考へたから、社會靜學よりも社會動學を重要視して居る。其の點に於てもコントと一致して居る。併し彼は又社會の一般的狀態に於ける社會現象の共存關係を重要視したから、社會の一般狀態の繼起或は繼續に於ては、前狀態の一部分が後狀態の一部分を產出するのでなく、其の全體が全體を產出するのであると考へた。是れも矢張りコントの抱いて居たのと同じ思想である。

さてミルは以上論述し來れるが如くに、コントにありてはまだ曖昧であつた社會學概念を、一般社會學概念として明確に規定したのであるが、然らば彼の一般社會學概念は、私がさきに區別せる三つの意味の何れのものに當るかと云ふに、先づ彼は私の組織社會學と稱するもの卽ち社會科學方法論と云ふ意味にて、彼の一般社會學の概念を解して居なかつたことは明白である。是れ彼は社會科學方法論を彼の論理學の一部分としての、或は其の應用としての精神科學方法論の中に、論述して居るからである。そうして嚴密に云へばミルの此の見解は正當であつて、私も社會

科學方法論は、さきに述べし如く、本來學問論の一部門としての方法論に屬す可きものと考へるのである。只私はヤハリさきに述べし如く、學問論及び社會科學方法論の現狀に於ては、社會科學方法論を一般社會科學としての社會學の一部門と見るのが、便宜であると考へるだけである。然らばミルの一般社會學の概念は、私の純正社會學と稱するものの意味に解されて居たかと云ふに、其の主旨や或部分に含まれて居るが、併しまだ私の總合社會學と稱するものから、明かに區別される一部門としては考へられて居ない。そうしてミルの一般社會學の概念は大體上私の總合社會學と稱するものに當るのであるが、併し其の中には純正社會學の主旨や或部分をも含んで居るので、純粹なる總合社會學概念であるとも云はれない。要するに彼の一般社會學概念は、まだ純正社會學或は形式社會學の部門と總合社會學の部門とを組織的に區別して居ない混沌たるものである。併し此の點に就ては、吾人はミルを非難することは出來ない。是れ純正社會學或は形式社會學の概念は、其の後社會學の研究が發達するに伴なふて、千八百九十年代に至つてタールド及びジムルによりて始めてやゝ明確に規定されたものであるからである。(但し私は大正二年に日本社會學院年報第一卷に於て發表せる論文中に指摘して置いた如く、ヅ・ロベルチーが千八百八十年代に公にせる著作中に、純正社會學と總合社會學とを區別する理論的基礎の重要なる一方面が發見されるのであるが、併し彼はそれを開展して現實に兩者を區別するには至らなかつた。)そ

うして始めて一般社會概念を大體上規定したと云ふだけで、吾人は社會學史上に於けるミルの功績を充分に承認せねばならない。

尙ほミルの社會學論を詳しく研査すると、其の中には今日の社會學上重大なる意義を有する幾多の思想が發見される。例へばマックス・ウエバーの理想型の概念の如きは、實質的にはミルによりて既にかなり明白に說述されて居る。又ヅュルケム派社會學の根本原理たる、社會的事實は社會的事實によりて、全體は全體によりて說明さる可きものであると云ふ思想の如きも、同派の社會學者の主張するよりは、より正當なる意味にて既にミルによりて論述されて居る。併し此處では其等の點に論及することは避け、只彼の社會學概念と次に批判せんとするジムメルの形式社會學概念との間に、如何なる論理的連絡が存立するかを極簡單に指摘するだけに止める。

ミルはさきに述べし如く社會科學的研究に二種ありて、其の第一種に於ては社會的事情の一定の一般的狀態卽ち社會の一定の一般的狀態が前定されて居て、そうして其の下で、與へられたる一の原因から如何なる結果が生ずるであらうかと云ふ問題が研究され、其の第二種にありては其等の一般的事情或は社會の一般狀態其物を決定する法則は、何であるかと云ふ問題が研究されると云ふて居る。かくて彼は社會の一般的狀態其の物を產出する原因及び之を特質附ける現象を研究する一般社會科學卽ち社會學と、社會の一般的狀態に於て一定の慾望の產出する結果を研究す

る特殊社會科學とを區別したのである。そうしてミルが社會の一般的狀態と稱するものは、諸般の社會現象を其の相合致する複合的全體に於て見たる具體的なるものにして、且つ彼は其の原因の探究に於ては、其等の一般的狀態の歷史的或は時間的繼起或は繼續を根本的に重要視して居たのであるが、然るに今ミルが社會の一般的狀態と稱するものを抽象的に解釋し、且つ繼起關係から切り離して考察する時は、それは人間と人間との關係の諸形式に分析し得られる。かくてミルの社會の一般的狀態と稱するものは、ジムメルが社會の形式と內容とを區別して、特に社會の形式と稱するものの總體に當り、そうして又ジムメルが特に社會の內容と稱するものは、ミルが一定の社會狀態の下で、一定の慾望が產出する結果と見るものに當るのである。

右の如くに解釋すると、ジムメルが社會の形式を對象とする特殊社會科學として立てたる形式社會學の概念は、ミルが社會の一般的狀態を對象とする一般社會科學として規定せる社會學の概念と、如何に論理的に連絡するものであるかは了解され、又それによりてジムメルの形式社會學なるものは、論理的には或は學問論的には決して一の特殊社會科學ではなく、一の一般社會科學であることが推定されると思ふ。詳しく次節ジムメルの特殊社會學說の批判に於て論ずるから、此處では只彼の社會學概念が如何にミルの社會學概念と論理的に連絡して居るかを、簡單に指示するだけに止める。